

11月7日報告資料

拙著『「資本論」の核心』（情況新書）から、初版本文簡単な価値形態についての解説を引用しておきます。（51頁～82頁）冒頭『資本論初版』価値形態論の引用が3頁にわたって収録されています。この部分はぜひ事前にお読みください。（2021年11月4日 榎原）

第三章 簡単な価値形態

第一節 冒頭の一番重要なところの解説

この章は初版本文の簡単な価値形態です。簡単な価値形態のところの訳書については、冒頭部分は久留間鮫造訳の『マルクス経済学レキシコン』第一巻から引用します。長いですが他の訳本では不正確なので、必要なところを全部示しておきます。

「リンネルは、1つの使用価値すなわち有用物の姿で、この世に登場する。それゆえ、その糊でごごわした物体性すなわち自然形態は、その価値形態ではなくて、価値形態の正反対物なのである。それはそれ自身の価値存在を、さしあたりはまず、自分に等しいものとして他の1つの商品、上着に連関することによって、示すのである。もしリンネルがそれ自身価値でないならば、リンネルは価値としての・自分に等しいものとしての・上着に連関することはできないであろう。質的にはリンネルは自分に上着を等置するのであるが、そうするのは、リンネルが、同種の人間的労働の・すなわちそれ自身の価値実体の・対象化としての上着に連関することによってである。そして、リンネルが自分に、x着の上着ではなくて1着だけの上着を等置するのは、リンネルが単に価値一般であるだけではなくて一定の大きさの価値であり、しかも1着の上着が20エレのリンネルが含んでいるのと同じだけの労働を含んでいるからである。リンネルは、上着にたいするこの連関によって、一石で何鳥をも仕留めるのである。リンネルは、他の商品を自分に価値として等置することによって、価値としての自分自身に連関する。リンネルは、価値としての自分自身に連関することによって、同時に自分を使用価値としての自分自身から区別する。リンネルは自分の価値の大きさ——そして価値の大きさは価値一般と量的に計られた価値との両方である——を上着で表現することによって、自分の価値存在に自分の直接的な定在とは区別される価値形態を与える。リンネルは、こうして自分を、自分自身において分化したものとして示すことによって、自分をはじめて現実に商品として、すなわち同時に価値でもある有用物として示すのである。リンネルが使用価値であるかぎりでは、それは1つの自立した物である。これに反して、リンネルの価値は、ただ、他の商品・たとえば上着・にたいする関係のなかにおいてのみ現われるのであって、この関係のなかでは、上着という商品種類がリンネルに質的に等置され、したがってまた一定の量において同等とみなされ、リンネルの代わりとなり、リンネルと交換可能なのである。それゆえ、価値は、使用価値とは区別された固有の形態を、ただ交換価値としてのその表示によってのみ、受け取るのである。

リンネルの価値の上着での表現は、上着そのものに1つの新しい形態を刻印する。じっさい、リンネルの価値形態とは、なにを意味するのであろうか？それは、上着がリンネルと交換可能である、ということである。上着はいまやまったくそのありのままの姿で、上着というその自然形態において、他の商品との直接的交換可能性の形態を、1つの交換可能な使用価値の・あるいは等価物の・形態をもつ。等価物という規定は、商品が価値一般であるということを含むばかりでなく、その商品がその物的な姿において、その使用形態において、他の商品にたいして価値として意義をもち、したがってまた直接に交換価値として他の商品のために存在している、ということをも含むのである。

価値としては、リンネルはただ労働だけから成っており、透明に結晶した労働の凝固体をなしている。ところが、現実にはこの結晶体は非常に濁っている。この結晶体のなかに労働

が発見されるかぎりでは——そして必ずしもどの商品体も労働の痕跡を示しているわけではない——、それは無区別な人間的労働ではなく、織布、紡績、等々であって、これらの労働もけっして商品体の唯一の実体をなしているのではなく、むしろもろもろの自然素材と混和されているのである。リンネルを人間的労働の単に物的な表現として把握するためには、それを現実に物にしているところのすべてのものを度外視しなければならない。それ自身抽象的であってそれ以外の質も内容ももたない人間的労働の対象性は、必然的に抽象的な対象性であり、1つの思考産物である。こうして亜麻織物は頭脳織物となる。ところが、諸商品は諸物象である。諸商品がそれであるところのもの、諸商品は物象的にそういうものでなければならない。言い換えれば、諸商品は、それらがなんであるかを、それら自身の物象的な諸連関のなかで示さなければならない。リンネルの生産においては一定量の間労働力が支出されてしまった。リンネルの価値は、このように支出された労働の単に対象的な反射なのであるが、しかし、その価値はリンネルの物体において反射されているのではない。その価値は、上着にたいするリンネルの価値関係によって、顕現するのであり、感覚的な表現を得るのである。リンネルが価値としての上着を自分に等置しながら、他方同時に、自分を使用対象として上着から区別する、ということによって、上着は、リンネル—物体に対立するリンネル—価値の現象形態となり、リンネルの自然形態とは区別されるリンネルの価値形態となるのである。*1

20 エレのリンネル=1 着の上着 または、x 量のリンネルはy 量の上着に値する、という相対的価値表現のなかでは、上着はただ価値または労働凝固体としてのみ意義をもつのではあるが、しかしまさにこのことによって、労働凝固体は上着として意義をもち、上着は、人間的労働が凝固している形態として意義をもつのである。*2 使用価値上着がリンネル—価値の現象形態になるのは、ただ、リンネルが抽象的人間的労働の、つまりリンネル自身のうちに対象化されている労働と同種の労働の、直接的物質化としての上着物質に連関しているからにすぎない。上着という対象は、リンネルにとっては、同種の人間的労働の感覚的につかまえられる対象性として、したがって自然形態における価値として、意義をもつのである。リンネルは価値としては上着と同じ本質のものであるがゆえに、上着という自然形態がこのようにリンネル自身の価値の現象形態になるのである。しかし、使用価値上着に表わされている労働は、人間的労働そのものではないのであって、一定の、有用的な労働、裁縫労働である。人間的労働そのもの、人間労働力の支出は、たしかにどのようにでも規定されることができるが、それ自体としては無規定である。それは、ただ、人間労働力が特定の形態で支出されるときにだけ、特定の労働として実現され、対象化されることができるのである。というのは、ただ特定の労働にたいしてのみ、自然素材は、すなわち労働がそのなかに対象化されていく外的な物質は、相対するのだからである。ただヘーゲル的な『概念』だけが、外的な素材なしに自己を客観化することをやってのけるのである。*3

リンネルは、人間的労働の直接的な実現形態としての裁縫労働に連関することなしには、価値または肉体化した人間的労働としての上着に連関することはできない。とはいえ、リンネルに使用価値上着への関心をもたせるものは、上着の羊毛的な快適さでもなければ、上着のボタンをかけられた有様でもなく、上着に使用価値としての刻印を押すそのほかなんらかの有用的な質でもない。上着はリンネルにとっては、ただ、リンネルの価値対象性をリンネルの糊でござごわした使用対象性から区別して表わすことに役立つだけである。リンネルは、その価値を阿魏か乾燥下肥か靴墨かで表現したとしても、同じ目的を達したであろう。それゆえ同様に、裁縫労働がリンネルにとって意義をもつのも、それが合目的な生産的活動であり有用的労働であるかぎりにおいてでのことではなくて、ただ、特定の労働としてのそれが人間的労働一般の実現形態であり対象化様式であるかぎりにおいてのみのことである。かりにリンネルがその価値を上着においてではなく靴墨において表現するとすれば、リンネルにとってはまたやはり裁縫ではなく靴墨作りが抽象的人間的労働の直接的実現形態として意義をもつであろう。つまり、ある使用価値または商品体が価値の現象形態または等価物となるのは、ただ、別のある商品が、前記の商品体に含まれている具体的有用的な労働

種類に・抽象的人間的労働の直接的実現形態としての具体的有用的な労働種類に・連関する、ということによってのみである。

われわれはここで、価値形態の理解を妨げるすべての困難のかなめに立っているのである。商品の価値をその使用価値から区別すること、あるいは、使用価値を形成する労働を、単に人間的労働力支出として商品価値で評価されるかぎりでの同じ労働から区別することは、比較的たやすい。商品または労働をまえの形態で考察するときには、あとの形態では考察しないし、あとの形態で考察するときにはまえの形態では考察しない。これらの抽象的な対立物はおのずからたがいに分かれるのであり、したがってまたたやすく見分けられうるのである。商品の商品にたいする関係のなかにだけ存在する価値形態の場合はそうではない。使用価値あるいは商品体は、ここでは1つの新しい役割を演じるのである。それは商品価値の、つまりそれ自身の反対物の現象形態となる。同様に、使用価値に含まれている具体的有用的労働が、それ自身の反対物に、すなわち、抽象的人間的労働の単なる実現形態となる。商品の対立的な〔2〕規定は、ここでは、互いに分かれるのではなくて、互いに反照しあうのである。これは一見するといかにも奇異に思われるが、立ち入って考察すれば必然的なものであることがわかる。商品は、もともと1つの二重物、すなわち使用価値および価値、有用的労働の生産物および抽象的な労働凝固体である。それゆえ商品は、自分が商品なのだということを表わすためには、その形態を二重にしなければならない。使用価値の形態は、商品は生まれながらにもっている。それは商品の自然形態である。価値形態は、商品が他の諸商品との交わりにおいてはじめて獲得するものである。だが、商品の価値形態は、それ自身がまた対象的な形態でなければならない。諸商品の唯一の対象的な形態は、その使用姿態、その自然形態である。ところで、1商品たとえばリンネルの自然形態はその価値形態の正反対物なのだから、それは、なにか他の自然形態を、他の1商品の自然形態を、自分の価値形態にしなければならない。それは、直接に自分自身にたいしてすることができないことを、直接に他の商品にたいして、したがってまた回り道をして自分自身にたいして、することができるのである。それは自分の価値を、それ自身の身体で、言い換えればそれ自身の使用価値で表現することはできないが、しかしそれは、直接的な価値定在としての他のある使用価値あるいは商品体に連関することはできる。それは、それ自身のうちに含まれている具体的労働にたいしては、抽象的人間的労働の単なる実現形態としてのこの労働に関係するということではできないが、しかし、他の商品に含まれている具体的労働にたいしてはそうすることができる。そうするためには、その商品はただ、他商品を自分にたいして等価物として等置しさえすればよい。1商品の使用価値が他のある商品のために存在するのは、まったくただ、それがこの他商品の価値の現象形態として役立つかぎりにおいてのみである。もし、 x 量の商品 $A = y$ 量の商品 B という簡単な相対的価値表現において、ただ量的な関係だけしか考察しないならば、そこに見いだされるものもまた、ただ、相対的価値の運動にかんするまえに展開した諸法則——それらはすべて、商品の価値の大きさはその生産のために必要な労働時間によって規定されている、ということにもとづいている——だけである。だがもし、両商品の価値関係とその質的な側面から考察するならば、われわれはこの簡単な価値表現のうちに、価値形態の秘密を、したがってまた、つづめて言えば貨幣の秘密を発見するのである。*4

(原注)

* 1 それゆえ、リンネルの価値を上着で表わす場合にはリンネルの上着価値、それを穀物で表わす場合にはリンネルの穀物価値、等々と言ったりするのである。このような表現は、どれもみな、上着、穀物、等々という使用価値に現われるものはリンネルの価値である、ということの意味しているのである。

* 2 見ようによっては人間も商品と同じである。人間は鏡をもってこの世に生まれてくるのでもなければ、私は私である、というフィヒテ流の哲学者として生まれてくるのでもないから、人間は最初はまず他の人間のなかに自分を映してみるのである。人間ペテロ

は、彼と同等なものとしての人間パウロに連関することによって、はじめて人間としての自分自身に連関するのである。しかし、それとともに、またペテロにとっては、パウロの全体が、そのパウロ的な肉体のまま、人間という種族の現象形態としても意義をもつのである。

* 3 「概念は、当初はただ主観的であるだけであるが、外的な物質または素材を必要とすることなしに、それ自身の活動に従いながら、自己の客観化へと前進する。」ヘーゲル『論理学』、367 ページ、所収、『エンチュクロペディー、第1部、ベルリン、1840年』〔岩波文庫版、松村一人訳『小論理学』、下、185 ページ〕

* 4 ヘーゲル以前には専門の論理学者たちが判断および推論の範例の形式内容をさえも見落としていたのだから、経済学者たちが素材的な関心にすっかりとらわれて、相対的価値表現の形式内実を見落としてきたということは、ほとんど驚くに当たらないのである。」(『マルクス経済学レキシコン』第一巻、大月書店、二三～三五頁、『マルクス・コレクションⅢ』、筑摩書房、二八五～二九二頁)

まず第一段落を読んでみましょう。

この第一段落が一番重要なところで、ここが分かれば全てが分かるという、多分そういう構造になっていますので、ここについてはゆっくりやってみましょう。ちょっと読んでみます。

「それはそれ自身の価値存在を、さしあたりはまず、自分に等しいものとして他の1つの商品、上着に連関することによって、示すのである。もしリンネルがそれ自身価値でないならば、リンネルは価値としての・自分に等しいものとしての・上着に連関することはできないであろう。質的にはリンネルは自分に上着を等置するのであるが、そうするのは、リンネルが、同種の人間的労働の・すなわちそれ自身の価値実体の・対象化としての上着に連関することによってである」

とりあえずは、ここまでが最もポイントになる点で、これを逐次説明していきましょう。

現行版の場合でしたら、二〇エルレのリンネルが一枚の上着であるという、この簡単な価値形態の背後には「相異なる諸物の大きさを、それらが同じ単位に還元されたのちに初めて量的に比較されるもの」であるという説明がなされています。同じ単位のものでそこに含まれているのです。これは『資本論』の四七頁(新書版一、八五頁)の下段です。二つの商品が質的に等置されている等置の関係だということを前提にして、価値表現の分析に移っています。ところが、それと比べて初版本文の場合はそうはなっていません。まず等置ということではなくて連関するというリンネルの主体的な行為として関係を見えています。ではどのように関係するのかという関係の仕方ですが、リンネルが自分の価値を上着で表現する関係の場合には、リンネルは自分に等しいものとしての上着に自分が連関しています。これは等置の関係におけるリンネルの側の行為が描かれていると読めます。言いかえれば、リンネルがどういうことを主張しているか、その象形文字の内容を読み取っているのです。このように解読することが、価値表現の理解の第一のポイントになります。そのことで質的にはリンネルは自分に上着を等置しているということが分かっていって、これは等置の関係である、しかも自分に等しいものとして関係しあっていることは、価値と価値の関係だということがだんだん分かっていきます。

そこで、このように自分に等しいものとしての他の一つの商品上着に連関する、という形で捉えたことの意味はどこにあるのだろうかと考えてみますと、リンネルが同種の人間的労働の、すなわちそれ自身の価値実体の対象化としての上着に連関するという構造が非常にはっきり分かります。つまり、上着を価値実体の対象化したものとしてリンネルが規定してしまっています。だから、リンネルのほうからの働きかけによって上着がどういうものになっているかが、このリンネルからの連関において、リンネルがどういう働きかけをしているかを解けば、非常にはっきりします。

この点は、なるほど現行版でも書かれていますが、そこでは上着は価値の実存形態として、価値物として意義を持つ、この関係においては上着がそうなのだということが指摘されて

いるだけです。ですから、リンネルの働きかけの結果そうになっているという価値関係における構造、この構造において上着は価値物になっているという動的な分析は現行版では省かれていることとなります。それはなぜかと言いますと、お互いに等しいものがあるのだということを前提にして解いたから、そうになっています。初版本文の簡単な価値形態の分析は、それを前提にせず、価値表現の独特の仕組みから同等性を導き出しています。これは前も言いましたように、初版本文の簡単な価値形態の分析の特徴です。そうすることによって、リンネルの働きかけによって上着がどのようなものにされているか、上着がある種の社会的な物にされていますが、それがどのようなものであるかが非常にはっきり分かるようになっています。

第二節 人間労働の抽象化の仕組み

そこからさらに進んでいきますと、何が分かっていくか、その次、ちょっと先を読んでみます。「リンネルは、他の商品を自分に価値として等置することによって、価値としての自分自身に連関する。リンネルは、価値としての自分自身に連関することによって、同時に自分を使用価値としての自分自身から区別する」。リンネルは自分自身が価値としては現れることはできないが、上着を自分の価値として等置することで、価値としての自分自身に関係できます。このような形で与えられているのがリンネルの価値の形態です。その説明がしばらく続きますが、「リンネルは、こうして自分を、自分自身において分化したものとして示すことによって、自分をはじめて現実に商品として、すなわち同時に価値でもある有用物として示すのである」。このように、リンネルと上着との関係をつかみますと、上着がどうして抽象的人間労働の対象化されたものになってしまっているか、あるいはリンネルと上着という異種の労働がどのようにして同等な人間労働に還元されているか、ということが読み取れていくのではないのでしょうか。

この点について若干説明しますと、まず、その等値の関係というのは実は第三者から見た立場であって、これは二つの異なる物が等値されているという見方になりますが、そうではなくて等値の関係をリンネルが上着に働きかけている、連関している、そういう関係だというふうに読むことが肝心です。そうすると、リンネルが上着自身を自分に等しいものとみなしていること、つまり、それ自身の価値実体の対象化であるというように上着に関係していることが分かります。これはどういう意味かと言いますと、リンネルが、上着は自分と同じものだと表現していますから、上着が自分であるということ表現しているのです。そうすると、上着を作る具体的労働はどういう労働かということは上着を見れば分かりますが、リンネルを見ても分かりません。ところが、ここでは上着はリンネルと同じだと表現されることによって、上着を作った労働がリンネルで表示される形になっています。

ここでの労働の抽象化は、実はこういう仕組みによるものではないのでしょうか。リンネルを見ても上着がどのようにできたかは分かりません。社会関係のなかでは上着はリンネルと同じ質のものだと表現されています。この商品と商品の関係のなかでの異種労働の同等な人間労働への還元が、等値されることによってなされるのですが、そこでの労働の抽象化は、こういう仕組みでなされているのではないのでしょうか。これは、やはり思考による分析的抽象とは随分違った事態抽象による抽象方法になります。あらかじめ同等なものが含まれているという形で簡単な価値形態を分析するのではなくて、質的に同等だということの、そういう式が成立する場合の根拠を問うのです。そうすれば、リンネルがどのように上着に関係しているかという関係様式を解明することによって、上着を抽象的人間労働の実現形態にしていることの意味もよく分かります。また、そういう異種労働の同等な人間労働への還元、その還元の仕組みが分かることによって労働の抽象化がなされるのも、どういう仕組みでなされて、どういう形でそれが成立しているかも非常によく分かっていきます。このように読みほぐすことが初版の価値形態論の、特に簡単な価値形態の理解の最大のポイントです。

今のところは実は付録がありまして、付録ではもっと簡単に説明されています。牧野さんの訳書を以下に引用しておきます。そこを見ますと、結局、今述べたようなことがマルクス自身の言葉で整理して説明されています。リンネルが上着に関係する、自分の質に等しいものとして関係するという関係の仕方は、結局、同じ実体を持ったもの同士が等置されている等置の関係だということをここで説明しています。こう考えていくと、そもそも等置という関係は、結局、非常に当たり前なものとして、あれとこれは同じだから等置されていると見ますが、等置の構造の場合には必ず等置される側が等置する側の質の代表になっているという関係が必ず起きています。等置する側が、同じものだという、そういうふうな働きかけをした上で、つまりは等置される側を両者に共通する質の代表者にした上で関係しています。そういう関係が実は等置です。ですから、このマルクスの解説は、単に価値の現れ方を通じて等置関係を解明したということだけにとどまらずに、等置関係一般における関係構造を解明したのもでもあると読む必要があるのではないのでしょうか。これは後に鉄と棒砂糖との重量比の例が現行版で引かれています、そういうことを理解する上でも非常に参考になる事柄です。以下に牧野訳付録を引用しておきます。

「 § 2 価値の相対的な形式

a) 相等関係

自己の価値を表現しなければならないのは亜麻布であるから、亜麻布から出発する。亜麻布は、上着と関係する。すなわち〔一般的に言うならば〕自己自身と種を異にする、なんらかのほかに商品と関係する。この関係は〔異種のもの〕等置の関係である。実際、20エルの亜麻布＝1着の上着、という表現の土台は、亜麻布＝上着〔という表現〕であり、これを言葉で表現したものが、上着という種の商品は、上着とは種の異なった商品である亜麻布と同じ本性、同じ実体をもったものである、という言葉にすぎないのである。このことは、たいいてい見落される。なぜなら、量的な関係、すなわち、ある種の商品が他の種の商品と等置される割合に目を奪われてしまうからである。〔その結果〕異なったもの大きさは、それらが同一の単位に還元されたのちに、はじめて、量的に比較可能になるのだということが、忘れられてしまうのである。同一の単位の表現としてのみ、異なったものは同名の大きくなり、したがって、通約可能な大きさになるのである。かくして、上の表現においては、亜麻布は、自己と同じものとしての上着に関係している、あるいは上着は、〔亜麻布と〕同一の実体をもったものとして、〔すなわち〕同じ本質をもつものとして亜麻布に関係させられているのである。かくして、上着は亜麻布に質的に等置されているのである。

b) 価値の関係

上着が亜麻布と同一であるのは、両者が価値である限りでしかない。かくして、亜麻布が自己と同じものとしての上着に関係するという、あるいは上着が同じ実体をもった物として亜麻布に等置されるということは、上着はこの関係のなかでは価値として妥当しているということを、表現しているのである。上着が亜麻布に等置されるのは、亜麻布もまた価値である限りでのことである。かくして、この相等関係は、価値の関係である、がしかし、価値の関係とは、なによりもまず、価値の表現であり、あるいは〔2つの〕商品の価値というあり方の表現であり、〔その時〕その商品〔すなわち亜麻布〕は自己の価値を表現しているのである。〔しかるに〕使用価値、あるいは商品体としては、亜麻布は上着から区別されている。それに反して、任意の他種の商品、〔例えば〕上着が亜麻布に等置される、あるいは亜麻布と本質を同じくするものとして妥当するような関係のなかでは、亜麻布が価値であるということが前面に出て表現されているのである。

c) 価値の關係に含まれている、価値の相対的な形式の質的な内実

上着は、それが、その生産のために支出された人間労働力の物的な表現であり、したがっ

て抽象的人間労働の固まったものである限りにおいて、価値なのである。〔ここで〕抽象的な労働というのは、上着のうちに含まれている労働の、規定された、有用な、具体的な性格が度外視されているからであり、人間労働というのは、ここにおいては、労働は人間労働力一般の支出としてしかみなされていないからなのである。かくして亜麻布は、その唯一の素材が人間の労働からなっているような物体としての上着と関連させられることなしには、ある価値物としての上着と関係することはできず、あるいは価値としての上着と関係づけられることはできないのである。しかし、亜麻布は価値としては、〔上着のうちにあるのと〕同一の人間労働の固まったものなのである。かくして、上着という物体は、この関係の内部では、上着と共通する亜麻布の価値の実体、すなわち人間労働を表わすものなのである。かくして、この関係の内部では、上着は価値の現象形態として、したがってまた亜麻布の価値の現象形態として、すなわち亜麻布の価値が現われる感覚的な形式として、妥当しているのである。かくして、このような価値の関係を通して、ある商品の価値は、他の商品の使用価値のなかで、すなわち自己自身とは異なった種類の商品体のなかで、表現されるのである。」（牧野道場訳『対訳初版資本論の付録』鶏鳴双書、一九七四年、六五～七一頁、『マルクス・コレクションⅢ』、三二九～三三一頁）

付録を続いて読んでいきますと、「この等置の関係は・・・価値関係である。」と書かれています。価値と価値との関係です。これは先ほどちょっと読みました本文の「リンネルは他の商品を自分に価値として等置する」云々というところの説明になっています。等置の関係というのは価値関係であって、それはまた何ゆえに価値の表現であり、価値存在の表現であるか、ということが付録で説明されていて、その価値の表現の仕方、これの独特のメカニズムがこの冒頭の何行かで説明されています。冒頭の何行かが、初版本文の価値形態論を解きほぐす鍵になっています。

第三節 分析的抽象の限界

では続いて先に本文から引用しておいた、第二段落から第五段落までを、ちょっと長いですが、通して読んでください。

ここで、まず第二段落ですが、等価物の規定が与えられています。等価物という規定は、しかし、ここでは現行版のように、等価形態の独自性とはなにかを相対的価値形態とは離れて分析するのではなくて、相対的価値形態の関係で等価物になっていることはどういうことなのか解明されています。結局、リンネルが自分に等しいものとしての上着に関連するという内容、この働きかけを受ける上着の側がどういうものになっているかが問題です。だから、上着は交換関係をのぞけば、単に人間の着衣本能を満足させる、ある有用物ですが、それがリンネルとの社会関係に置かれますと独特の社会的な性格をもつのです。等価物という規定は社会的な規定ですが、その等価物ということはどういうことなのでしょう。

「上着はいまやまったくそのありのままの姿で、上着というその自然形態において、他の商品との直接的交換可能性の形態を、1つの交換可能な使用価値の・あるいは等価物の・形態をもつ。」と書かれています。だから、この特徴は上着が上着という形を捨てて何か別の社会的な形態を得ることではなくて、上着というその自然形態のままで他の商品との直接的な交換可能性の形をもってしまいます。この辺から異種労働の同等な人間労働への還元という、そういう問題に次に移っていきます。

第三段落目のところで、その構造がありますけれども、先ほどの最初のところで、リンネルが上着に関係していく、そういう関係の仕方が独特の抽象化のシステムを暗示しているということを述べましたが、ここでは異種労働の同等な人間労働への還元という問題が全面的に展開されています。また、この辺から、現行版では相対的価値形態の内実というところがありますが、それに相当する内容に移っています。

この異種労働の抽象的人間労働への還元の説明が第三段落にあるのですが、その特徴は、

分析的抽象と対比する形で述べられていることです。まず始めに分析的抽象が述べられています。「リンネルを人間的労働の単に物的な表現として把握するためには、それを現実に物にしているところのすべてのものを度外視しなければならない。それ自身抽象的であってそれ以外の質も内容ももたない人間的労働の対象性は、必然的に抽象的な対象性であり、1つの思考産物である。こうして亜麻織物は頭脳織物となる。」というのがそれです。これは実は『資本論』の価値実体の分析、商品章の一番初めの、商品の二要因のところ、交換価値を分析して抽象的人間労働を導き出した過程においてマルクスが行使した方法です。ここでは、そういった方法の限界が述べられています。商品がそれ自身の関係において異種労働を同等な人間労働に還元することによって抽象的人間労働を出現させているという、現実の関係と比べてみると、こういう思考における抽象には限界があります。どこに限界があるかといいますと、思考が分析して抽象化したものは一つの思考産物です。もちろん、思考産物がそのまま現実の存在と一致しているという可能性もありますが、ここではそうではないのです。というのも、「諸商品は諸物象である。諸商品がそれであるところのもの、諸商品は物象的にそういうものでなければならない。言い換えれば、諸商品は、それらがなんであるかを、それら自身の物象的な諸連関のなかで示さなければならない。」と書かれています。だから、明らかにマルクスはここで思考による分析的な抽象によって得られた抽象的人間労働の観念、リンネルを分析的抽象によって抽象的人間労働に還元する、そういう作業によって得られたものと、それと商品の価値関係のなかでのリンネルの抽象的人間労働への還元とは全然違うのだとここで言おうとしています。

では、リンネルがその商品の価値関係のなかでどのように抽象化されるのか、続けて読んでいきますと、「リンネルの生産においては一定量の人間労働力が支出されてしまった。リンネルの価値は、このように支出された労働の単に対象的な反射なのであるが、しかし、その価値はリンネルの物体において反射されているのではない。その価値は、上着にたいするリンネルの価値関係によって、顕現するのであり、感覚的な表現を得るのである。」とされています。異種労働の同等な人間労働への還元という以上は、商品の関係を同時に労働の関係と見ているのです。労働の関係と見ると、リンネルがそこにあることは、リンネルを作る労働、そういう労働が支出されてしまった結果がそこに表現されています。そういう意味で、リンネルには人間の労働が対象化されていると見るのですが、単なる使用価値としてのリンネルであれば、それは具体的有用労働の対象化として意味をもつわけです。それから、リンネルでも二メートル、三メートル、四メートルという数でリンネルを数えるとしたら、そこにはやはり単なる人間労働力の支出としてリンネルが考えられていると言えないこともありません。ところが、リンネルが価値としては抽象的人間労働であることは、そういうリンネルを分析して、具体的有用労働であるとか抽象的人間労働であるとかということとは別なのです。なぜかと言えば、リンネルの生産において支出された労働が、リンネルという物体において反射されているのだったらそうかも知れません。しかしながら、それが上着に反射されています。「リンネルの価値は、このように支出された労働の単に対象的な反射」と書かれています。ですから、価値は労働であるといっても、労働を支出する過程が価値ではなくて、生産物に対象化されてそこで初めて価値になるのです。その対象化されるということ労働から見ると、労働の対象的な反射だということになります。その反射がリンネルに反射されているというのであれば、さっき言ったように分かりますが、上着との関係でその反射作用があります。そうすると、リンネルを作った労働は価値としては上着です。リンネルの価値は上着だということは、リンネルの価値を作った労働は上着と同じ、という関係でリンネルは自分の価値を表現するのです。そうすると、リンネルが上着であるところでは、先ほどとは逆に言っていますから、そうすると、上着を見てもリンネルをどういうふうにしたかは分かりません。そういう意味で、リンネルを作る労働が抽象的人間労働に還元されています。結局、異種労働の同等な人間労働への還元という問題は、先ほどに見た、リンネルが上着に対して自分と同じ質のものとして関係するという関係構造と、裏の関係になっています。リンネルが自分の価値は上着だと自分の価値を上着で表現している関係が同

時に、リンネルと上着というお互いに異なった労働生産物を等置することによって、その労働生産物を作った労働を、それぞれ抽象的人間労働、同等な人間労働に還元するようになっています。そういう意味で、リンネルを作る労働は上着を見ては分からないということ、ここでマルクスは言いたかったのではないのでしょうか。分析的な抽象と対比してここで述べられている事柄の意味はそのようなことです。

第四節 事態抽象の論理

その次に、本文からの引用の第四段落と第五段落です。ここでは上着が労働凝固体として意味を持つということ、今度は労働レベルで分析しています。これはどういう意味を持っているかと言いますと、ここでリンネルからの働きかけによって上着が抽象的人間労働の凝結になっている、とマルクスは言っています。それが果たして可能かどうかも含めて、そのことのもっている深刻な意味が問題です。これが実は価値形態の秘密の本当の中身ですが、その分析に移っています。その後半部分に「上着という対象は、リンネルにとっては、同種の人間的労働の感覚的につかまえられる対象性として、したがって自然形態における価値として、意義をもつのである。」とあります。ところが、「しかし、使用価値上着に表わされている労働は、人間的労働そのものではないのであって、一定の、有用的な労働、裁縫労働である。人間的労働そのもの、人間労働力の支出は、たしかにどのようにも規定されることができるが、それ自体としては無規定である。」云々と続きます。上着を、抽象的人間労働の実現形態であると規定します。これは、リンネルの上着に対する働きかけ、それを解読することによって、マルクスはこう言ったのです。そういうことが果たして可能かどうか、同種の人間労働であると規定された上着のほうにとってみれば、上着が単なる抽象的人間労働だけを表現しており、それ自身が物質化されたものとみることが果たして可能なかどうかを、今度は労働のレベルで分析しています。人間的労働とは何らかの具体的有用労働としてしかありえませんが、人間労働一般を作る労働は現実にはあり得ず、ヘーゲルだけがそういうことをできるとしたらできるでしょう。同じことは、そのもう少し先、第五段落のところへ入りますと、「リンネルは、その価値を阿魏か乾燥下肥か靴墨かで表現したとしても、同じ目的を達したであろう。それゆえ同様に、裁縫労働がリンネルにとって意義をもつのも、それが合目的な生産的活動であり有用的労働であるかぎりにおいてのことではなくて、ただ、特定の労働としてのそれが人間的労働一般の実現形態であり対象化様式であるかぎりにおいてのみのことである。」と述べられています。

そういうことが分かってきますと、今度は面白いことに、具体的労働が上着を作っているのですが、リンネルとの関係においては、この具体的労働が実は人間的労働一般を実現する、そういう様式になっているのだとマルクスは分析するのです。ですから、まずリンネルとの関係で上着がどういう質にされているかという、等価物にされています。等価物にされているということは、それは価値一般になっているのだということを見てきました。そういう価値一般を作ることは、どのようにすれば可能なのでしょうか。価値一般を作ることは、抽象的人間労働一般を働かせるということではありません。それができるのはヘーゲルだけです。つまり観念論の世界だけです。現実には具体的な有用労働しか労働を対象化することができませんが、それが分かると、今度は上着を作る労働が、具体的有用労働として機能した結果、そこに単なる抽象的人間労働を実現したという役割を社会的には果たしてしまいます。このように、問題を読みとるべきではないかと、ここでマルクスは発見します。これが、いわゆる価値形態の秘密の本当の内容をなしています。マルクス自身、それをまとめて、第五段落の最後で「つまり、ある使用価値または商品体が価値の現象形態または等価物となるのは、ただ、別のある商品が、前記の商品体に含まれている具体的有用的な労働種類に・抽象的人間的労働の直接的実現形態としての具体的有用的な労働種類に・連関する、ということによってのみである。」と言っています。

結局、抽象的人間労働の凝固物に上着になっているという場合に、上着は抽象的人間労働

という何かそういう種類の労働が働いてできたということではありません。上着を縫うという裁縫労働、そういう具体的有用労働が上着を作りますが、その具体的有用労働の対象化が、リンネルとの関係のなかでは価値を織ったという、そういう社会的な意味を持つのです。これが価値形態の秘密であるとマルクスは解いています。

付録引用の「c) 価値の関係に含まれている、価値の相対的な形式の質的な内実」を読みますと、簡単に整理されてまとめられています。

「かくして、このような価値の関係を通して、ある商品の価値は、他の商品の使用価値のなかで、すなわち自己自身とは異なった種類の商品体のなかで、表現されるのである。」と述べられています。現行版でも、相対的価値形態にある商品の価値が等価形態にある商品の使用価値で表される、これが価値形態の秘密だといわれていますが、その価値形態の秘密が秘密たり得る根拠、それは具体的な有用労働でありながら、それがリンネルとの社会関係のなかでは抽象的人間労働を支出したことになります。だから、上着を作る裁縫労働は、上着という使用価値ではなくて価値一般を織ったのだということになることを言わないと、単に使用価値で表されるという結果だけを指摘しただけでは、価値形態の秘密の理解にはほど遠いのです。

こういうことが分かってきますと、だんだん初版本の価値形態が面白くなってくると思うのですが、ここで、そういう価値形態の秘密を明らかにしたところで、また非常に困難な問題が出てくるといいます。本文からの引用文の第六段落を次に読んでみましょう。

第五節 反照の論理

この価値形態の秘密から出てくる結論は、使用価値あるいは商品体がそれ自身の反対物の現象形態になることです。こんなことが果たして可能だろうかということ、マルクスはここで考えています。そこで、これは実は使用価値と価値、という対立物、商品は使用価値と価値、という二要因を持っています。商品を単独で考察し、一方は使用価値で考察すれば具体的有用労働の産物であり、価値としては抽象的人間労働の凝固物だという理解になります。この理解でいきますと、商品は使用価値として見たら価値ではないし、価値として見たら使用価値ではない、こういうふうにならざるを得ない規定はお互いに対立しあっています。ところが、ここでは使用価値が価値の現象形態になるということですから、使用価値が二つの機能を果たしているということになります。こういうことは反照の関係だとマルクスは見ます。

この反照の関係は分かりにくいのですが、どういうことかと言いますと、上着という自然形態がリンネルの価値を照り返しています。あるいはリンネルの価値という価値の定在が上着という自然形態を照り返しています。こういう関係を反照の関係といいます。ですから、何か上着という一つのものに双方が投影されています。だから等価形態にある商品には価値と使用価値との双方が投影されて、双方が反照しあっている、こういう関係だということです。この反照の関係が成立したのは、自然物が商品という社会的関係をもつことによって、その形態を二重化したのです。そう考えると、まさしくこの反照しあうというのは合理的ではないかとマルクスは解いていきます。その反照の関係は合理的であって、それは一商品が他の商品の自然形態を自分の価値形態にするという形で回り道をして、自分の価値を表現しています。回り道についての論争とかは、またいろいろ紹介すると、それなりに面白いと言えば面白いのですが、時間がなくて、それについては『価値形態・物象化・物神性』などを参照していただくとして、とにかくそういう形で価値形態の秘密があって、その価値形態の秘密があるということは、使用価値と価値、という両規定が反照しあっているということの意味を以て、そういう反照関係は商品が形態を二重化することによって必然的に生じる事態だ、とマルクスはここで簡単な価値形態の相対的価値表現を解説したのです。

第六節 等価形態の謎性

これで『レキシコン』から引用した箇所は終わりますが、あと、マルクスは続けて等価形態に簡単に触れて、等価形態の謎性について簡単に述べています。それは『マルクス・コレクションⅢ』で言いますと二九二頁から二九六頁まででこれが本文の簡単な価値形態の分析に相当する部分です。ここのところに等価形態の謎性が出てきます。

「だから上着にリネンが関係することの最終成果、つまり上着の等価形態、直接に交換可能な使用価値としての上着の規定性は、上着がリネンに対する関係の外部にあるときでも、たとえば温かさを保つ上着の属性とまったく同じように、上着の物的属性であるかのように見える。二〇エレのリネン＝一着の上着という相対的価値の最初の、または単純な形態では、このまちがった見え姿はまだ固定していない。」(今村訳、二九四頁)

同じ本の二九八頁からは一般的価値形態を扱っていますが、そこでだんだんそういう外観が固まっていき、一般的価値形態になるにつれて、「ひとつの商品の等価形態が他の商品たちの諸関係の照り返しでなく、その商品自身の物的本性からとびだしてくるかのような外観は、単独の等価物が一般的な等価物へと成長するにつれてゆるぎないものになる。」(今村訳、三〇八頁)と書かれています。最終的には交換過程論で、現行版の八三頁で、虚偽の仮象を追究したという話が出てきて、貨幣においてはこの等価形態の謎性が完成すると書かれています。これは後で交換過程のところでも扱いますが、このことに注意しておいてほしいということが、その一つです。

あと、付録の等価形態論ですが、これは現行版の土台となっていますが、しかしここには、現行版の物神性論へ振り替えられているところもあります。付録の等価形態論で特に注意しておくべきところは、その第二の特性です。「たとえば等価物上着のなかに潜む裁縫労働は、リネンの価値表現の内部でも人間労働でもあるという、という一般的属性をもつものではない。そうではなく逆に、人間の労働であることがリネンの本質として認められるのであって、裁縫労働であることは、たんにこのリネンの本質の現象形態または特定の顕現形態として認められるにすぎない。」(今村訳、三三六～七頁)云々とありまして、これは転倒だと言うのです。その転倒は、そのあと、ローマ法とドイツ法の例を持ち出して、法一般とは何かといえ、ローマ法もドイツ法も法であり、普遍的な法一般は個々の法ではなくて、個々の法に共通なものだというのが普通の考え方です。ところが、法という一般的抽象的なものがローマ法とかドイツ法といった具体的なものの内に実現されていると言うと、それは観念的な神秘的な展開の仕方になります。ところが、諸商品の関係で、その価値形態のなかでの等価物のあり方は、実は個別的なものが抽象的で一般的なものの実現形態となっています。だから、論理として言えば神秘的な形を実はとっているのだ、とここで指摘しています。個別的なものが抽象的で一般的なものの実現形態になることは、さっきも言いましたように、上着を製造する労働の具体的な労働が抽象的な人間労働の実現形態になるということです。今や上着という個別的な物が価値一般を代表してそういう普遍的なものになっており、一般的なものになっている、こういうことなのです。

いずれにしても商品の価値形態の秘密は、例えば労働の抽象化にしても、それから個別と一般(普遍)との関係にしても、思考の論理からすれば非常に奇妙な形で諸関係と諸機能があります。使用価値と価値の関係一つにしても、反照するとか形態を二重化するとか、こういうようになっています。これは結局、自然的なものが同時に社会的なもの、自然的な物の関係が同時に社会的な関係を表現しているということですから、そういう形が出てくるのは当然でしょう。したがって、価値の分析をする場合には表の、表面的に現れる、感覚的につかめることだけを頼りにしてはにっちもさっちもいかなることが、こういうことから明らかになっていきます。あるいはまた、普通の論理学では手に負えないので、弁証法が鋭くなっているとマルクスは言っていますが、それが分かれば、初版本文の価値形態論を研究することの一つの目的は達成されたこととなります。